

のです、「ああ、自分の最期は昨日
やったんか」と。

だから人は、亡くなった時に多
かれ少なかれ心残りややり残した
ことを口惜しく思うのです。

神様に「昨日やと思えへんかつ
たからやり残したことがある。5
分だけ部屋に帰らしてください」
と言うと、「じゃあ、5分だけ
やで」と帰らしてくるなら
いいのですが、絶対それは叶
いません。

どうしても、「あれをやっ
ておけばよかった」「これも
やっておいたらよかったと
家の中の様子を天国からじ
つと見ている状態になっ
てしまふのです。

遺品整理というのは、その状
態のお部屋のお片付けを、故人
に代わってしてさしあげる仕事
だと私は定義しています。そして
いつも天国から故人に見られてい
るような気持ちで仕事をしていま
す。

ですから、「これは大切にしてい
たんやろうな。ちゃんと供養して
あげなあかん」と思うようになり、
日本で初めて遺品の供養サービス
を開始し、東京に遺品供養専用ホールと
いうものまでつくりました。それを通
して遺族の気持ち様が穏やかになれば、
と思っています。

孤立しないためにも 日頃から仕事以外の 人間関係を持ちましょう

今日のタイトルは「孤立死を防ぐ」
です。悲しい孤立死を迎えてしま
う方が非常に多いのが現実です。

実際に私たちが年間でお手伝いす
る約1500件の遺品整

理のうち、全体の6分の
1にあたる200件から
300件は孤立死らし
き現場です。

死後1日以上誰に
も発見されずに部屋
の中で亡くなり、なお
かつ、臭いが残ってい
たり、虫がわいていたり、
体液の染みが付いて
いたり、「ここで亡
くなつたんだ」とわ
かる痕跡がある現場
です。

部屋の中で亡くなって見つからな
い状態がしばらく続くとさまざまな
影響が出てきます。建物の価値を下
げることもなるし、ご近所の方に
も精神的な影響を与えます。

ですから、亡くなってまで人に迷
惑をかけることのないように、常日
頃から人間関係を作っておかないと
いけないのです。

* * * * *

最近はこのような孤立死が社会的
な問題として取り上げられるよう
なってきましたが、死は誰にでも訪

れる当たり前のものですから、「孤立
死が悪い」とか「問題だ」という考え方
に私は少し違和感を感じます。

では何が問題なのかと言いますと、
孤立化、つまり人間関係が乏しくなっ
ている人たちが非常に増加している
ことが問題なのです。

せっかくな生きてきて、いろんな人と
関わられる状態にありながら、それを自
ら放棄して孤立してしまっている人
が大勢いることが問題なんですね。

その原因として、どんどん便利な世
の中になって、他人とコミュニケーション
を取らなくても、生きていくこと
ができる環境になってしまった実情
があります。

そして、人付き合いを煩わしいこと
だと認識し、常に人間関係を維持する
ことの重要性に気付かず、ある種の我
慢ができなくなってしまうの
です。

また、男性の経済的不安が増し、未
婚者も増加の一途を辿っており、单身
世帯が急増しているの、これから孤
立していく人たちは
ますます増えていく
と考えられます。

一方で、今や孤立死
は高齢者だけの問題
ではなくなりました。
意外かもしれませんが、
部屋で亡くなって、死
後数週間経って発見
される50歳代の方が
非常に多くなつてき

ており、私の会社でお手伝いするケー
スでは、月によつては60歳以上よりも
50代のほうが多い月があるのです。孤
立死はお年寄りだけの問題ではない
ということなのです。

ある程度高齢になりますと、人間関
係が少なくなるのは、ある意味では自
然なことかも知れませんが、50
歳代以下の方が、近所付き合いや友人
関係を全く持っていないケースが非
常に多いことに、不自然さや問題を感
じなければならぬのです。

特に男性は日ごろから仕事以外の
人間関係を持つていない人が多く、一
人住まいの場合は、方が一部屋で亡く
なつたときに気付いてくれる人がい
ないのです。

ですから、特に男性は、他人事と思
わずに自分にもそうなる可能性があ
ると自覚し、仕事以外の人間関係の大
切さについて、常に考えておくべきだ
と思います。

(8月29日、宮崎県が主催した「孤立
死防止セミナー」より)